

# 日露戦争期における一西洋人の日本観

——ヴァームベリ著『黄禍』（一九〇四年刊）の翻訳と解説——

稲野 強

## はじめに

本稿は、日露戦争（一九〇四—五）開始後まもなくヨーロッパ人によって書かれた小冊子『黄禍』<sup>①</sup>の翻訳と解説からなる。

黄禍とは、一言で言えば、一九世紀の終わりから二〇世紀初めにかけてヨーロッパ人の間で流布した黄色人種脅威論である。黄色人種の「脅威」は、日露戦争前後に限れば、日清戦争（一八九四）で「眠れる獅子」の中国に勝利した「小国」日本の台頭に対する危険視もしくは恐怖感である。日露戦争では、日本と戦うロシアが自国の戦争の正当性を国際世論に訴えるために、ヨーロッパ人の古い過去の記憶を呼び覚ますこの黄禍を利用した。それに対して日本政府は過敏に反応し、反黄禍宣伝活動にすばやく着手した。こうした両国の激しい広報・宣伝戦によって、日露戦争は歴史上「日本で始めての本格的な情報戦」と位置づけられるほどであった。

日露戦争勃発以来、欧米の新聞・雑誌には、ロシア支持や日本支持のさまざまな論調の記事が数多く現われた。各国政府の思惑が、微妙に絡み、日英同盟のイギリスでは、おおむね日本支持が、露仏同盟のフランスでは、ロシア支持が、英仏と対立し、かつロシア皇帝とドイツ皇帝が従兄弟同士であるドイツでは、日本に批判的であった。だが、ジャーナリズムの立場・性格を詳細に見れば、もちろん必ずしも国単

位ではありえず、党派性を持つ新聞の論調も戦争の経過とともに変化した。例えば、イギリスの自由党系の新聞『デイリー・ニューズ』『デイリー・クロニクル』はある時期には日本に批判的であったし、社会主義系新聞では国を問わず、反ロシア的であった。例えばオーストリア社会民主党機関紙『アルバイター・ツァイトウング（労働者新聞）』もそうであった。

さて、本稿で訳出する『黄禍』の特徴は、何といつてもその成立の経緯にあるだろう。この小冊子は、当時のヨーロッパの自由主義的傾向を持つヨーロッパ人が、義憤に駆られて執筆した反専制主義的<sup>②</sup>反ロシア的・親イギリス的、日本鼻根の啓蒙書と見えるが、実はこれは日本政府、直接には在外日本公使の依頼を受けて執筆されたものである。すなわち本書の出版は、ロシアの主張する黄禍に反駁するために日本の在外公館が行った戦時広報活動の一環に他ならなかったのである。

ではこの小冊子の執筆者は、どのように選ばれたのだろうか。執筆者はヴァームベリ・アールミン（一八三二？—一九一三）という<sup>③</sup>。彼は、かつてハンガリー王国の一部であった現在のスロヴァキア共和国の首都ブラチスラヴァ郊外で生まれたハンガリー系ユダヤ人で、ヨーロッパで一世を風靡した冒険家・探検家の一人で、十数カ国語を操る東洋学者であった。彼の一番の功績は、青年時代に当時鎖国状態であった中央アジアの汗国にイスラムの巡礼者に変装して潜入し、

ヨーロッパに中央アジア情勢の貴重な情報をもたらしたことである。ロシアと中央アジアの覇権を激しく争っていたイギリスが、彼の情報をいち早く評価した。帝国主義時代に即応したヨーロッパの探検ブームのおかげで、彼の波乱万丈の冒険物語はイギリスで出版され、たちまち版を重ね、イギリス社交界・講演会に招かれ、一躍時代の寵児になった。彼は日露戦争当時にはすでにハンガリーのブダペスト大学を退任し、イギリスやドイツの新聞に反ロシア的・親イギリス的な記事を数多く書いていた。

このヴァームベリーに目をつけたのが、日露戦争当時ウィーンにいたオーストリア・ハンガリー帝国駐劄日本公使牧野伸顕(一八六一—一九四九)であった。彼はヨーロッパで著名なヴァームベリーに日本の反黄禍活動の一翼を担ってもらうことにしたのである。つまりウィーンにおける牧野公使の役目の一つは、東中欧に広がるハプスブルク帝国およびバルカン半島の諸民族の動静を探ることともに日本の立場を広報することであったから、彼は開戦まもなく日本政府の「黄禍防止の方針」に依って、ロシアの影響下にある東欧に流布する可能性の高いロシアの反日宣伝活動、いわゆる黄禍の沈静化を図る計画を立てたのである。その計画のひとつが、ヨーロッパの著名人に、日本の真の姿を紹介してもらい、黄禍の幻想を打ち砕く小冊子を執筆してもらうことであった。こうしてヴァームベリーに依頼して出来上がったのが、以下で訳出する『黄禍』である。

本稿は、翻訳を通して、この小冊子の生まれた経緯も珍しく、日ごろ目に触れることのない当時の珍しい出版物の存在と流布していた黄禍の内実を明らかにし、日本の研究者のあいだで行われている黄禍に関する学問的な議論に寄与するものである。

## (注)

- (1) 『黄禍』の翻訳は、ドイツ語版『Die gelbe Gefahr』Budapest, 1904. によった。なお本書にはフランス語版もある。Le Peril Jaune,

Budapest, 1904.

- (2) 黄禍に関する近年の研究で最も目覚ましい成果は、飯倉章氏の『イエロー・ペリルの神話—帝国日本と「黄禍」の逆説—』彩流社、二〇〇四、であろう。本稿執筆に当たっても、氏の著作から多大な示唆を得た。ハインツ・ゴルウィツァー(瀬野文教訳)『黄禍とは何か』草思社、一九九九、や古典的な、橋川文三『黄禍物語』筑摩書房、一九七六、一九八〇、をも参照。
- (3) 拙稿「牧野伸顕と日露戦争(一)—彼の反黄禍論活動を中心に—」『群馬県立女子大学紀要』第八号、一九八八、七一一—八四頁、松村正義「日露戦争における日本の『外国人操縦』(上)(二)」『帝京国際文化』第一号、一九九八、七三—一六頁、を参照。
- (4) 日露戦争が、情報戦争であったという視点に関しては、日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』成文社、二〇〇五、四二〇頁、を参照。
- (5) イギリスの新聞論調に関しては、飯倉、前掲書、特に一八五、一八九頁を、また当時のオーストリアにおける新聞論調に関しては、拙稿「牧野伸顕と日露戦争(二)—オーストリアの新聞から見た戦争世論—」『群馬県立女子大学紀要』第一〇号、三三—四七頁、を参照。
- (6) ハンガリー語名は Vambery Armin (ハンガリーでは、姓、名の順である)。なお日本語で「ヴァームベリー」と表記するのは、『岩波西洋人名事典(増補版)』岩波書店、一九八一、によった。他に「ヴァーンベリー」「バンベリー」も使われている。彼に関しては、L. Alder, R. Dalby, *The Dervish of Windsor Castle. The Life of Arminius Vambery*, London, 1979. が欧文の唯一の本格的な伝記である。拙稿「ヴァームベリー」尾形・加藤・樺山他編『歴史学事典』第五巻(歴史家とその作品)、弘文堂、一九九七、六四—六五頁、を参照。
- (7) ヴァームベリーの旅行記には日本語版がある。もともと有名なのは、小林高四郎・杉本正午訳『ペルシア放浪記・托鉢僧に身をやつして』(東洋文庫四二)平凡社、一九六五年。
- (8) ヴァームベリーの新聞記事に関しては、自伝『The Story of My

*Struggles. The Memoirs of Arminius Vambery, 2vol., London, 1904, p.291* を参照。  
 (9) 拙稿「前掲「牧野伸顕と日露戦争（一）」を参照。

### ヴァームベリー著『黄禍』（訳）

「哀れなヨーロッパよ、汝は近代的教育の使命感という崇高な衝動に駆られて汝の眼差しを極東に向けてきた。汝は人権と自由に燃えて、我々の文明の旗を遙かな日本まで掲げて行つた。だが日本は汝が果たした貢献に対して、卑劣にも恩を忘れることで応えた。というのはアジアの汝の生徒の中で最も有能な日本は汝の手に負えなくなつてしまつたからである。汝は、何百万という黄色人種が、この優れた生徒の下でいまやヨーロッパに侵攻するか、極東における我々の通商を妨害し、我々の影響力を無に帰せしめるはずだという危険な考えに陥つてゐる。哀れなヨーロッパよ、汝は何と不憫なことか！」

これに類似した嘆き節は近代ヨーロッパの至る所で声高になつてきた。権勢を誇る君主すら、警告を発しているのだ。「ヴィルヘルム・J・R」という署名入りのクナックフス教授が描いた絵の中に、「ヨーロッパの諸民族よ、諸君の聖なる財産を守り給え」という叫びが読み取れるはずだ。この叫びは、この君主の警告が非常に深刻で、重大であるということを実に表している。まったく決して冗談などではない。もし同じような警告が、シュプレー川沿いに住むドイツ人が膠州湾の特別な利益貸借料に関わつていた時代、そしてまたマダム・ゲルマニアをモデルにした親愛なる隣人のロシア夫人が満州と遼東半島の占領計画をすでに立てていた時に必然的に端を発するとすれば、我々は皇帝の警告を肝に銘じておきたい。これはまったく不吉な出来事に他ならなかつた。そこで明白になつたことは、上流階級の人々は自分たちの極東における独自の植民地政策に比べれば、ヨーロッパが危険に

さらされて不幸になる可能性はそれほど深刻ではなかつた、ということである。またすべては単なる威嚇射撃だつたということが分かつた。それによつてきな臭い煙の背後に隠れて征服の事業を密かに、いとも簡単に遂行しようとしてゐるのではないか、というヨーロッパの邪推を払拭しなかつたのである。「君主の言葉は、言葉の中で最も重要だ」という東洋の格言と皇帝ヴィルヘルムが語つたことは、実際に一部は証明されたのだ。というのは太平洋上に一四万七六五五イギリス平方マイルの狭い国土と四五〇〇万の人口を持つ小国日本が、片や八六六万〇三九五イギリス平方マイルの領地をもち、一億四一〇〇万人を数えるロシアに宣戦布告したばかりか、世界全体が驚いたことには海陸でロシアに徹底的な打撃を負わせたからである。私が述べたいのは、日本民族の力、情熱、祖国愛に関してはドイツ皇帝の警告の一部は証明されたことである。だが今やこの力強く情熱的で愛国的な民族がこの熟練、エネルギー、卓越した美徳を遠方の征服に用いて、武力でヨーロッパを脅かすことができ、そう欲求している、などということは到底考えられない。日本が武器を取らねばならなかつたのは直接ロシアと隣接しているがために、自国の発展や、経済的な利害、それどころかその存在自体を脅かされると考えたからに他ならないからである。なぜならロシアは飽くことを知らぬ領土的野望を抱く策略家であるが、そういう国を日本が隣人にせざるを得ないのは決してありがたなことではない。それはまったく安住の保証にはならず、希望に満ちた展望を抱けないからである。歴史から明らかなように、これまでロシアはアジアの広大な地域で北から南へ常に征服の足跡を残してきており、決して逆方向ではない。朝鮮や満州におけるロシアの地位をかんがみると、日本が自ら将来を心配するのは当然なのである。

もしロシアがこの地位に支障なく留まっていたら、天分に恵まれた日本民族の命運はおそらく早々に尽きてしまつたに違いない。ロシアは一步一步侵攻し、万策を弄して、隣接する地域を侵害し、すぐにもミカドの帝国はロシアの属国になつてしまふからである。

ヨーロッパの人々は、この事態を近代になって初めて知るようになった。だが日本にとって北から押し寄せてくる暗雲はすでに以前から不安の種であった。一八八八年に当時ベルリンに留学していた日本人の斉藤シナイチロウ氏は、こう私に書いて寄こした。「私は日本人として中央アジア問題の今までになく緊急の局面に無関心でいることはできません。あなたは中央アジアについて積極的な関心を持っておられます。ロシアの征服欲はヘラートやコンスタンチノープルと同様満州や黄海に対しても精神的であり、清の軍事力が不足している状況では、満州全体の征服ばかりか、帝国の解体すら、ヘラートの占領よりもはるかに容易に思われます。他に何も目論んでいないにしても、シベリア横断鉄道計画の決定は将来に絶望的な影を投げかけます」——これ以前にも日本では類似の意見が存在しており、日本は、ロシアが東アジアで前進するごとに、艦隊や陸軍を戦闘準備態勢に移すことで、密かに精神的に準備を整えて応えてきたのである。日本は強力なツァーリ国家に対する優位をそのような見事なやり方で明らかにしてきたのである。日本は決して自分から進んでロシアに戦争を仕掛けることはなかった。日本の戦闘準備はひとえにロシアの飽くことを知らぬ領土的渴望によって強いられたものである。したがって日本人が征服を目論んでいると推測している者は、この勇敢で、愛国的な民族はどんなに優位に立っても、防衛戦争に限っており、めつたなことでは征服戦争を行わなかったという事実を忘れてはいけない。

ロシアとの話し合いによる平和的解決は、アジアにおけるロシア政策の基本原則から見ても絶対的に不可能である。それゆえ戦争のサイコロがどれほど振られようと、日本はロシアの勢力範囲の境界をはるかに北に押し戻し、祖国の国家的、文化的、経済的地位が平和的に発展するのを妨害するロシアに対して、安全を確保するまでは休息できず、また休息することは許されない。

\*

日本を平和攪乱者と呼ぶとすれば、それは無知や偏見に他ならない。

日本は、自国の兵士が今日戦場で河のように流している血を犠牲にしてまで、征服を求めているのではない。日本は、祖国の領土のための独立という聖なる権利に対する防衛、守護を求めているのである。日本は誰にも妨害されることなく教育、啓蒙、自由というすでに築いた道を進んでいこうとしている。もしこの驚異的なアジア民族が優れて模範的に始めた近代化という事業を妨害し、行く手を塞ぐとしたら、それは我々の数世紀にわたる教育精神に対する犯罪的な行為であり、決して許せない罪ではなかるか。ただアジアの諸民族を長い間研究している者、そしていかに我々が数世紀以来中東の諸民族を文化的に侵略してきたか、いかに我々は当地の無知と腐敗した乱脈財政の代わりに秩序と合法性と近代教育を導入しようとも、これまで目立って改革された様子が見られない、ということを確認している者、それに対して日本はいわばデウス・エクス・マキナ<sup>(8)</sup>を若々しく、力強く、文化を改革しつつ、際立って優れているとされている者、そのように考える者だけがアジアの東境での日本人の功績を正當に評価し、感嘆できるのである。このように文化的に熱心で、実力ある民族は、二、三〇年を経てアジア主義の束縛から解放され、我々と肩を並べるようになった。<sup>(9)</sup> こういう民族は決して軽率に世界を震撼させる道を歩まず、身を削るような努力で獲得した平和と教育という神聖な財産を征服と領土獲得に利用しようとはしないだろう。日本は断じてそのようなことはしないし、できはしない。それは、日本人の民族性とまったく矛盾している。なぜなら日本民族は非常に勇敢かつ愛国的、情熱的ではあるが、根本においては、ただ国家の繁栄を築くために産業と通商の向上を目指しているからで、戦争は当然有利な手段ではない。

以上のように何人も我々に反論できないとすれば、次のように尋ねたい。ヨーロッパを狙った秘密の陰謀は日本人の仕業だといわれているが、いったい事実なのだろうか。そもそもどんな証拠があつて「黄禍」が存在すると、言えるのか。言明した者すら信用していないような、政治的目的で世界に送り込んできたこの亡霊を詳細に検討すると

すれば以下のことが挙げられる。すなわち、一、「黄色人種」の諸民族が民族的な立場から相互に手を組んで、「白色人種」に敵対する立場を取るといふ、多くの蓋然性が存在すること。いらぬ詮索であるが、これら白・黄色両人種は、あくまで地上では長く共存できず、いずれか一方が支配的な立場を占めるか、破滅せねばならない、と。近代まではそうした関係は考えられなかったが、日本の突然の覚醒や強化によって疑いの念が起った。つまり知的で精力的な日本人は、今やアジア諸民族の頂点に立ち、世界制覇の競争を始めるにちがいない、と。付言すれば、この見解はほぼ双方の人種間の平和的な共存が不可能であるという非常に間違つた前提に基づいている。二、ほとんどの黄色人種が帰依する仏教は、白人のほとんどが信仰するキリスト教に敵意をもっている信じ、キリスト教信者である白人は、キリスト教世界に対して仏教が黄色人種の支配的な宗教であるとし、この戦いに宗教的な動機があるとしている。日本の覚醒と再生、日本の力の自覚は、今やキリスト教世界にとって公然たる脅威だと考えられてきた。キリスト教徒の聖なる規定を堅持し、異教の襲来から身を守るために、地球上最も広く分布したキリスト教以外の宗教を信奉する諸民族を抑えることに全力を尽くさなければならぬ、と。三、産業と通商の分野における黄色人種の民族的な進歩と協同は白色人種を危険にさらしている、と。これまで通常白色人種が独占してきたとされる分野で、新たに覚醒した民族の本格的な侵略を恐れている。極東の資金は我々に比べて低く、中国人や日本人は西欧の労働者よりもつつましく、勤勉で、自制心があり、忍耐力があるので、今や極東で生産された製品は相当な競争を生み出し、欧米の経済的生存を脅かし、我々の富を台無しにするのではないかと恐れている。

\*

この三点において「黄禍」という妄想から発した恐怖と非難、疑念は最高潮に達するのである。我々が反論する前に、この問題に関して東京の古い友人が私に宛てた一通の手紙の抜粋を披露させて頂きた

い。「我々日本人はヨーロッパがロツクやヒューム、ゲーテ、モンテスキュー、バツクル、トルストイなどの人々を輩出し、彼らの教えが近代文明に大きな影響を生み出したことを理解しています。そのヨーロッパがこの浅薄な、嘲笑すべき『黄禍』のような思想に惑わされるとは信じられません。歴史の専門家や民族学の研究者が、私たちが諸民族の連帯、統一、すべての人種の親交について語っているとき、悪意と無知が憎悪と不和の種を撒き散らすのを傍観することができませんか」——そう、善良な日本人はそれが精神的な錯誤の悲しむべき表れだと、正しく主張している。私は「黄禍」という暴論に対し、上述の三点について以下のように可能な限り誤解を解かねばならないと考えている。

まず黄色人種が一丸となつてヨーロッパに攻め込んでくるという作り話がある。つまり西欧に近代的なフン族が侵攻し、ジンギスカン風あるいはチムール風の侵攻があるという妄想が肥大し、その結果気弱になつた西欧が地獄の恐怖に陥いるという。不幸を預言する者はすでに、いかに果てしなき鐵路が極東から我々の土地に中国人や日本人の軍隊を溢れさせているか、いかに彼らがすべてを征服し、過去に蒙つた災難の復讐を我々にするつもりかを、すでに予告している。それはまさに想像するだに恐ろしい、身の毛もよだつようなことだが、このおぞましいイメーヅには事実に基づいた根拠がひとつかけらも見当たらないのである。なぜなら第一にそれほどの遠隔地から巨大な軍隊が遠征を企てることは、計画は立てこそすれ、実行するのは困難で、たとえ実行できるとしても、その力では結集したヨーロッパの力に絶対に刃向かうことはできないからである。第二に、中国人が突然国民性を変え、若返つたことを我々はまだ信用しているわけではない。このアジア的な保守主義を体現した中国は、日本のように新しい世界の方向に容易に踏み出すことはできないからである。中国の視野は久しく過去に、日本の視野は未来に向けられている。とくに中国では軍事的精神の目覚めを問題にするのは困難である、若い中国人は朱熹から次

のような教育を受けているからだ。つまり外国を侵略する侯は軽蔑され、会戦に勝利したとしても將軍は絞首刑に処せられる、またたとえ將軍が生来強く、勇敢で、才があり、お上の命令により優秀な兵士になったとしても、老いれば戦闘には無関心になるものだ、と教えられている。熱心で、冷静で、つましい中国人は何よりも生業、快適な生活、平安を優先させるのであり、戦争の栄冠の印、月桂樹には、心を動かされないものである。傑出した英雄的な精神をもつ日本人は、祖国での平和事業や文化的な発展を妨げられないよう、外国の攻撃に対してのみ勇敢に立ち向かうのである。日本が中国に対して行った戦争は、もっぱらロシアの目論見に対する防衛戦であり、ヨーロッパが日本から勝利の成果を奪わなかったならば、今日ロシア皇帝に対する戦争に至るはずはなかったのだ。中国人や日本人はヨーロッパで支配的な植民地熱という領土的渴望やキロメーター病に躍起になっていない。そのため彼らがすぐさま遼東半島を侵略する危険があるというのは馬鹿々々しい作り話の類であり、注目には値しないことを繰り返しておこう。これに関し、末松男爵が三月一九日付のニューヨークの新聞『キャリア』で正しく指摘している。「我々は一つの国家を目指しており、もっぱら精神的陶冶を獲得しようと努めている。我々は決して領土の拡大を求めてはいず、人種的差別を決して好まない。我々は自らを治め、平和裏の進歩を望んでいるが、決して他民族を征服し、圧迫するつもりはない。我々はヨーロッパ的な文明に基づき、諸民族の調和を図り、平和のうちに留まっていたいのである」。

ところで悲観論者は、日本人の軍事攻撃に関してこの威嚇方法が効果的だと確信しているわけではないらしい。というのは反日運動を成功させるために、日本人の異教が強大化し、キリスト教世界に脅威を与えるかもしれないという論拠が持ち出されたからである。意図的かどうかは不明だが、我々の時代に信仰が大きく弱体化したが、それは無視され、まだ重要視されていない。しかし「黄禍」の宣伝者は、日本の勝利はキリスト教信仰にとって危険だと決め付けようとしている。

る。彼らは完全に思い違っているのだ。極東の宗教は、イスラム教徒のアジアやいわゆる啓蒙化されたヨーロッパに比べそれほど重要な役割を演じていない。信教の自由と寛容に関しては、異教徒と蔑まされてはいる日本人の方が我々よりも進んでいるのである。日本の憲法では、宗教の完全分離の原則が成り立っている。信仰は市民の個人的要件とみなされており、国家は介入せず、学校でも宗教教育の授業科目はない。その代わり高名な賢者や道徳家の教えに基づく道徳教育があるのである。誰が仏教、神道、キリスト教に帰依してはいるかが、今日日本の政府や社会では無頓着である。あらゆる社会層や影響力の強い高級官僚の世界にキリスト教徒がいても、決して不思議ではない。彼らは同国人に完全に信頼され、自らのキリスト教の信仰告白も何の妨げにはならないのだ。現在の統計によれば、今日日本には一三万三五八一人のキリスト教徒がおり、プロテスタント、カトリック・ギリシア正教徒から成っている。その頂点には一〇二二人の宣教師がいるが、七四四人が日本人の聖職者である。日本人のキリスト教徒の中には影響力のある地位にいる者も多い。二、三の例を挙げてみたい。政党の指導者として次のようなキリスト教徒が知られている。すなわち元国会議長中島男爵、嶋田、片岡、根本、江原、サイハラ、鳩山氏がおり、進歩党や立憲党に属している。公生活でもキリスト教徒は重要な役割を演じている。三好氏は最高裁判所長官、青木子爵は枢密院顧問官、大山侯爵夫人は、元帥夫人である。昨年の秋死去した片岡氏は政党のリーダーで、衆議院議長であったが、熱烈なプロテスタントであり、臨終に際し彼が愛唱していた賛美歌を歌ってくれるように懇願したという。教育界には中島、高橋、小沢、村上、神田、浅田、平井、村井など有名なキリスト教徒の教授がいる。女性教師には矢島、津田、瓜生、桜井、安井がおり、東京の女子大学長には成瀬師がいる。最後にキリスト教徒の新聞を挙げよう。キリスト教徒でも、日刊紙のリーダーとして世論に重要な影響力を行使している人たちがいる。徳富（国民新聞）、島田（毎日新聞）、頭元（ジャパン・タイムズ）と横井、山路、

瀧越、岩本氏などは雑誌の編集者である。<sup>19</sup>さらに、寛容、人間性、正義を鼻にかけているヨーロッパ諸国と比較すれば、次のように確信できる。すなわちヨーロッパ社会で悪評をかこっている日本人は、昔の教師たちに多くの模範例を示すことができるだろう。例えば東京で数千の日本人仏教徒、神道家、キリスト教徒が集まり、この戦争は人種的、宗教的敵愾心とは無関係で、日本はひたすら平和、平穩、陶育を希求しているという声明を出したが、無駄に終わった。というのは片やヨーロッパ社会は再度極東に十字軍を送り込み、あらゆる手段を講じようとしているからである。前述した末松男爵は、高名な伊藤伯爵の娘婿であるが、以前言及した論文の中でこう述べている。「我々を異教徒と呼ぶ心ない人々がいるが、日本には憲法によつて保証された自由を信じており、日本は、今戦争をしている相手国よりも百万倍自由である、とさえ言うことができる。我々をよく知る人も認めているように、我々はすべてのことに寛容であり、自由でありたいと考え、努力している。我々はさらに進歩を望み、この美しく小さな国を科学と産業、芸術と知性の指導者に築き上げたい。それどころか我々はすべての人種、国民、人間の下で平和と協調の手法となることを希望している」<sup>20</sup>。現代日本の教養人はすべてこのように語り、考えているのである。そこで私はこう質問したい。一体これが戦争と殺戮、放火や破壊を企てる民族であろうか、そして彼らは将来我々の西欧文明と自由の危険極まりない敵になるのだろうか、と。

\*

「あなたはそもそも経済的危険をも頭から否認しようとしているのですか」と尋ねられるかもしれない。いや、そのようなことはまったく念頭にない。黄禍について語るとき、公平無私で、無党派の人は、すべて以下のことを認容せねばならないだろう。すなわち日本人は、近代文明世界のあらゆる分野で進歩を遂げ、産業・通商においても、学問・芸術においても、一定の水準に到達するほど、非常に才能に恵

まれ、積極的かつ意志が強い民族である。だからこそ日本人は極東において我々の強力な競争相手となり、経済目的を妨害し、我々の今までの貿易収支は損なわれるかもしれない、と。だがこれはまったく日本人の行動と努力の結果なのだ。なぜならば我々が有能な生徒をあらゆる分野で全力を尽して教育し、訓練した後で、決してその業績の素晴らしい結果に憤つてはならないし、生徒が見事に習得したからといって妬んではならないのである。それは不当で、浅ましいばかりでなく、子供っぽく、嘲笑すべきである。東洋の格言曰く「よき弟子は、達人となつて師を凌がなければならない」と。―だが日本人は確かにまだそこまでは達していない。日本はヨーロッパの教養にはまだ追いついていない。しかし日本にはその可能性があり、必ずやそうなるであろう。これは阻止不可能である。それは健康な木の成長に似て、才能ある民族の成長は力尽くで押し留めることはできないのと同じなのだ。さらに私は、以下のことを主張したい。日本は有能な生徒から、今や近隣の同じ出自の中国の教師の役割を努め、日本に伝えられた我々の文化は、さらに実をつけて伝播していく、と。これも我々は阻止することは不可能だ。これもまた我々の文明の活動が当然もたらした結果であるから。これは極東で遂行している文化闘争の進化であるとも言える。三億五〇〇〇万人の中国人（まだ誰も数えたことはないが）はある点では日本人を凌いでいる。日本人はヨーロッパでは頻繁に悪口雑言をたたかれていたが、決して分相応に評価されず、理解もされていない。しかし将来ヨーロッパの予想を激しく覆す可能性がある。一方、中国人は一般に考えられている程のまま絶望しているわけではない。すでに中国の過渡期は過ぎており、千年の眠りから目覚め、活動を開始し、注意を喚起しようとしている。中国は以前には先祖の墓を壊さないよう鉄道を敷設させないと言われてきた。だが今や鉄道網は瞬く間に全土に広がり、十年後には中国は鉄道で覆われることになるだろう。中国人は強烈な生命力を持っている。その排他性は古い文化をうぬぼれていた結果であった。中国はヨーロッパがまだ未

開だつた時代にすでに文明を有していた。中国人はキリスト誕生以前から天文学に造詣が深く、数学や三角法の基礎を知っており、中国にはヨーロッパの哲学よりも古い哲学の歴史がある。芸術や科学においても驚嘆すべきことを成し遂げてきた。そういう民族は、易々とは没落しないのである。平和に安住し過ぎた結果、中国人の民族的本能は眠らされ、活動を忘れてしまつていたのである。だが決定的な必要に迫られた結果、ようやく目覚めたのである。黄色人種の兄弟の日本人が幸い隣人であり、教師と仰げると気づいたのである。中国はますます目を覚まし、古い中国は自立し、大きな変化が生じるであろう。改革事業を成し遂げるには、中国の国土は十分豊かであり、国民は有能である。今はロバート・ハート卿が回想録の中で述べているように、<sup>23</sup>地代を今の八〇〇から四億テールに上げることは簡単だ。これだけあれば大陸軍と艦隊を創設し、どんな教育機関を設立するにも潤沢な資金となるであろう。以上は認めるが、この計画遂行の時期に関しては、警告する者に賛成はできない。中国での事はゆつくり、最大限ゆつくりと歩を進めねばならないからだ。

しかしこの点に関し革命家、例えば康有為<sup>24</sup>やその同志の転覆計画にはほとんど影響はないだろう。これは国民性や中国民族の何千年にも及ぶ歴史に深く根ざしているからである。今のところ日本人の戦勝を喜んではいないが、民族心理の永遠に不変の法則を改め、人類の歴史の流れを突如変更することは不可能だ。

黄色人種の諸民族の生活におけるこのような改革は当然起こる。だがそれは、ヨーロッパ人の予想以上に緩慢に遂行され、最終的には全く別の形態になるだろう。中国は強力であり、外国の侵略に立ち向かうことが、日本のためにも重要なので、日本は隣人であり人種上の兄弟の中国を非常に熱心に支援するはずだ。今日中国の省の多くで日本人将校が、中国人の非正規軍を指導している。また日本の学校が大勢の中国人学生に近代科学を教えており、将来若者たちは祖国の改革に協力するであろう。中国人の文化的覚醒を支援する「東亜同文会」が

数百万の中国人を眠りから覚まそうと全力を尽くすのは当然のことだが、<sup>25</sup>何事も行うより言うが易しであろう。これは実際には極東における我々の文化的な努力の当然の結果であり、文化は過去から現代に至るまで隣の土壌に移植され、常に新たな地域を開拓しようとしてきたのである。しかし残念ながら、その結果、ヨーロッパで次のような意見が高まつてきた。つまり第一に黄色人種の代表である両者が緊密に連携し親交を深めている。第二にヨーロッパに危険が迫っているというのである。

\*

日本と中国の親交に関して言えば、そのような万一の事態ははるか先のことである。両者の深い嫌悪感や軽蔑を知れば、中国人と日本人とを隔てる数世紀にもわたる憎悪は、少なくともアジアでは簡単に消えることはないだろう。そのため弁髪の子、中国人は長いこと外見上、性格上、考え方が根本的に異なる日本人をいまだ重要視してこなかった。つまり相互に歩み寄ることは困難であり、まして融和などは論外なのである。外部からの攻撃に対する利益共同体として、確かに一時的な相互理解はあるかもしれないが、同盟は倫理的、人種的基礎に基づいて成り立っているわけではない。日本人は、まったく別の要素から成立している。日本人は中国文化を学校で教えられたのだから、そこで学んだ事柄を自分の民族的特質に合わせ、完全に變形してしまった。仏教は中国から日本に伝えられたが、日本の仏教はまったく中国の仏教とは異なっている。文学、思考方法、そして習俗、慣習もわかりである。そのため両民族の親密な交流、中国に対する日本の指導的な役割は決して問題にならないだろう。—これら両民族がいかに根本的に異なっているかについては、中国がすでに教世紀間西欧と交流があつたにもかかわらず、西欧から何も学んで来なかったが、日本は二、三〇間に非常にヨーロッパ化されたということを強調すれば十分であろう。もっぱら悲観論者だけが、ヨーロッパに対する黄色人種の目前に迫つた闘争あるいは復讐戦における中国・日本的一致団



結を意図的に問題視するのである。しかし日本が万一ロシアに勝利すれば、ヨーロッパを脅かす差し迫った危険になると、断固主張する者がおり、このための預言者すら存在していた。彼らは日本人のこれまでの戦勝を、黄色人種だけでなく、アジア全体が「小気味いい」と感じていた、と主張した。「ついに東洋人は我に帰つたのだ、とアジアの民は歓声をあげて喜んでゐる。今こそ東洋人は傲慢な西洋人たちに教えたいのだ。ようやく決着を付ける日が到来した。もう我々は襲撃の対象には決してならない」。新聞の通信員は、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、またインドでも復讐の感情が目覚め、必ずや日本の指揮の下で東洋全体が立ち上がり、白人を追放するであろうと、報告している。このようなニュースは気弱な人々をぞっとさせるかもしれない。だがアジアに精通している者には、アジア人が一丸となつてことを起こすという自体妄想に過ぎないことを認識している。それは今日ヨーロッパが一丸となつてことを起こすなどと同様ありえない考えなのだ。

また産業、通商の分野でも黄禍は今ほとんど問題にならない。第一にそういうことは、周知のように急速に生じるものではない。第二に極東での産業の飛躍は、日本の例が示す通り、西欧からの輸入の増加をもたらししているからである。以下の輸出入に関する一八六八—一九〇三年のリストが最良の証拠である。すなわち日本が、輸出を増大すればするほど西欧の得意先となるのである。

つまり日本の工業と隣国への輸出量が拡大すれば、それだけ西欧から輸入量が増大するので、貿易上特に損害を蒙ることはない。しかし日本や将来的には中国も自らの経済的利益のために我々の教えを活用し、近代科学の方便にするのを止めることは不可能だということになれば、どうなるであろうか。

これに答えるのは非常に難しい。教師は、生徒が卒業研究を立派に仕上げるのを禁止できないように、ヨーロッパは、日本人が貿易と工業を発展させ、競争に参加するのを禁止できないからである。それを

黄禍とみなすなら、ヨーロッパ史またはヨーロッパの文化国家にもある意味で同様のことが言える。つまりヨーロッパの影響力はその東部にも増大しており、その結果生じるドイツとロシアの危険も指摘すべきなのである。最近のアメリカの危険にも言及するならば、アメリカとも戦わなければならないだろう。

\*

それゆえ最近の人口に膾炙する黄禍という合言葉を考えると、黄禍という言葉は悪意に満ち、不正、不当であり、馬鹿げたことだと思われる。その言葉によつて日本に対してのみ敵対心を煽ろうとしているのは明らかである。あたかもこの勇氣と才能がある民族が、勃興してきた北の大国を動揺させるのをあらかじめ知っていたかのようにである。だがロシアではすでに黄色い小人が北の巨人の足で踏み潰され、クロバトキン將軍が東京でロシアの和平条件を口述筆記させることになる<sup>23</sup>と吹聴している。だが今や戦闘はロシアの目論見とはまったく別の展開となり、ロシアの陸海での敗北が、かえつて黄色人種の力を雄弁に語る場所となつた。その結果なおさら黄禍という作り話が誤つた説得力を持つようになったのである。幸いなことに恐怖を煽る言葉は、どこでも効力がある訳ではない。例えば、現実的なアメリカ人やイギリス人は、この問題に最も関わつており、日本の優越を最も恐れているはずだが、きわめて冷静であるばかりか、日本の勝利を喜んでさえているのである。なぜならば彼らはアングロ・サクソンの自由主義的教育を受けた日本人がひたすら文化的目的を追求し、平和的意図を抱いており、経済活動を決して妨害せず、西欧と自由な競争をしようとしていることを知っているからである。無知、偏見、嘲笑すべき先入観が支配し、破壊を煽るような悪意に満ちた恐怖心が大手を振つているところでのみ、黄禍が深刻に取り上げられ、黄色人種がヨーロッパ人をすぐさま攻撃し、平和を乱すと考えているのである。個人的人格が形成され、視野の広い自由主義的なヨーロッパ人がそのような子供じみた言葉に耳を貸すとはとうてい思えない。ましてやそうした言

葉に振り回されるとは信じ難い。もしそうであれば、ヨーロッパが金銭欲や領土侵略欲に駆り立てられて、東洋の兄弟の前に現れ、文化の旗印が単なるむなし口実、偽善の演技、そして悪意、妬み、嫉妬にのみ満たされ、アジアを敵視し、攻撃しようとするれば、我々はヨーロッパ文明世界の原則を冒瀆することになるであろう。なぜなら東洋の兄弟は我々の教義に喜んで耳を貸し、順応し、自らの一〇〇〇年の過去を否定してまで我々の模範に従ってきたからだ！それは残酷で、卑劣で、許せないことなのだ！

ところで心外にも私は夢想家、狂信者などと呼ばれているらしい。私が非現実的な目的のために誤解していると思いたがっているのだらう。アジアにおける我々の進出、アジア人の歴史への我々の干渉は、今までの尽力の論拠であった物質的利潤や権力の拡大化のためではなく、高い理想とより高貴な問題に触発されたことだ、という信念を持たないわけにはいかない。言葉を駆使して我々が表明した文化的使命が無用の言葉に過ぎず、空虚な嘘であることは極めて悲しむべきことと思われる。それによってヨーロッパはアジアの兄弟をも欺くことを企んでいるのだ。だが否である！いずれにせよこれは地理学と民俗学に貢献した英雄と科学の殉教者と貿易のパイオニアに対する侮辱であろう。大砲と積荷ばかりか思考や理念をもヨーロッパはアジアに送り出してきた。我々は二〇〇年以上にわたって、アジアの人々の眼目を覚まし、無知と専制の束縛から解放し、よりよい理念の世界を広めようとしてきた。その結果、日本民族にすばらしい成果をもたらしたにもかかわらず、我々は突如日本に襲いかかり、口汚く罵り、侮辱し、我々の教えに値しないと言い出した。その結果、他のアジア人はヨーロッパ文明が拡大するのを嫌悪し、我々の意図を公然と呪うことになろう。日本は遠方の広大なアジアの中で、徹底的に文明化された唯一の民族である。その急速な改革は人類史において並ぶものがない。キリスト教の西洋が数世紀を要した教育と教養という大事業を日本は数十年でやってしまったからである。

極めてアジア的な民衆のこの大きな変化がどのように起こったのかは、まだ十分言葉を尽して語られてはいない。

\*

日本はずっと以前から、他のアジア人には見られない独自の傑出した適応能力とすばやい理解力を持っていた。日本は西洋文明を、瞬間に取り入れた。そもそも七世紀の末ごろには中国文化を急速に体得していたのである。日本人はまた非常に早い時期に西洋と初めて出会っていた。それは一五四九年ポルトガルの宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着し、キリスト教の伝道を開始した時であった。日本政府が十字架の印の背後に政治的意図を嗅ぎつけ、キリスト教に門戸を閉ざしてしまった責任は、ひとえに僧侶たちが争いを好んだためである。出島におけるオランダの在外商館を除いては、日本は二世紀の間ヨーロッパ人に閉ざされていた。アメリカの分遣艦隊司令官ペリーが一八五三年に極東の島国の正面玄関の扉を叩くまで、国を閉ざしたままであった。それから十数年後將軍家は崩壊し、現在の統治者、天皇睦仁が皇位についた。以前には権勢を誇った封建領主たちは自発的に天皇の手に、特権と法を委ねた。強力なヨーロッパを恐れ、諸侯やその重臣はヨーロッパ文明世界が優位であることを確信したため、その文明を受け入れることを決議し、すぐさま実行した。天皇の最初の第一歩は新しい時代の政治的原則を宣言することであった。その五原則の特徴を以下に挙げよう。

一、自己の意思ではなく、常に世論に従って統治すること。  
二、国の高位・下位のすべての身分の者は国民的再生の仕事に従事すべきであること。

三、文官・武官、すべての国民は以前の体制への逆行を阻止すべきであること。

四、すべての因襲、古い偏見を除き、公生活は正義と公正の原則に従って規定されるべきである。

五、英知、学問、芸術は地方でも必要とされ、すべては帝国の再生の

ために協働すべきである。

今や改革の分野に生じたことは、この基本原則と一致していた。帝国の首都は京都よりほぼ中央に位置する東京に移され、天皇と大名の關係は規定された。改革の過程で最も重要な契機となったのは、西洋へ一大使節を派遣したことである。この使節は、日本がヨーロッパと歩調を合わせ、以前將軍家との間で締結された条約の改正を打診し、西欧諸国の組織をあらゆる立場から学ぶ意志を世界に公言することになった。この様々な人間と身分の代表者からなる使節団は我々の公生活のありとあらゆる分野に注目した。憲法、文武管理、財政、交通、裁判、公教育、工業の奨励と保護、貿易、農業、社会制度、さらに使節団が西洋で見たありとあらゆることは、徹底的な研究対象となり、実行可能な限り、国内で応用されたのである。帰国後彼らが政府に提出した膨大な報告書は、大部分が新生日本の創造と基礎に寄与してきた。この使節は約一〇〇人から成っており、その中には名だたる外交官、政治家、將軍、財界人、学者や一連の知識欲の旺盛な若い人々が含まれていた。

知識欲に燃えた日本人の多くはもろろんそれ以前にも、以後にも西洋に赴き、政府からも派遣された。高級官僚、特に大学教授、正規学校の教師、高等女学校の男女教師が長短期にわたりヨーロッパやアメリカに派遣された。

それはひとえに国費あるいは私費で近代的な学問を学び、しかるべき教育を身につけて故郷で生業に役立てるためであった。ヨーロッパの知識は近代日本にとって実り豊かな資本とみなされ、それがない者は出世できず、チャンスすらもてなかつた。西洋の原則により帝国を改組し、西洋精神を導入するのは可能であった。日本では以前中国文学の知識が大変尊重されていたが、今やあまり顧みられなくなった。教養人に要求されるものが、以前とは根本的に異なってしまったのである。閣僚、政治家、一級のジャーナリスト、銀行の頭取や社長はすべて多かれ少なかれ、近代的な教養を身につけていなければならず、

頭官もしかりであった。このようなやり方でのみ時代の進歩的な政治を築き、世界中を驚嘆させるような事業を遂行することができるのだ。

\*

にもかかわらず、日本が成し遂げた成果に難癖をつけ、日本の革新の価値と重大さを過小評価しようとする人々がいる。特に日本には今日まで自由主義政党、保守政党が存在していないことから、まだ議会政治が十分機能していないと指摘する人に対し、我々は次のように言わねばならない。ヨーロッパではイギリスが議会制の発祥地だが、依然として多くの国では、まだ議会制が不完全な状態にある。したがってヨーロッパ以上に完全な議会制度を、極東に要求するのは不公平であろう。日本の議会制の欠陥を補うものとして、一八八八年に天皇が發布した憲法は、国民に真の幸せをもたらすものである。つまり憲法はこの国の徹底した自由主義的な政府に確証を与えているからである。日本の市民は平等の権利を有し、宗教であれ自己の政治的な見解であれ、わずかな制約しかを受けていない。現代日本ではヨーロッパのほとんどの国に比べ、保護制度、優遇制度も極めて少なく、能力次第で公生活でも最高の地位につくことができる。大分以前に導入された義務教育は非常に成果を挙げている。一九〇二年の統計によれば、女子の七七%、男子の九五%が公立学校に通っている。教育内容は、地方の需要に合わせた二、三の学科を除くと、ヨーロッパとまったく同じである。最近の就学数はさらに飛躍的に増大した。進取の気性は、上流層に限らず、最低辺の階層にまで浸透してきている。誰もが教育を受けたがるのは、教育があればこそ出世できることを承知しているからである。これらの状況を正當に評価するならば、いかに日本が短期間で高い教育水準に達したかは容易に理解されるだろう。要するに日本は高い教育水準を保っており、改革をこのようにスタートさせた民族が、西洋のほぼ進歩的な民族側に立つのは当然なのである。日本は今日、精神的、物質的な活動分野で欧米と最も緊密な關係にある。

日本は学問研究の分野でも欧米の協働者であり、人類の進歩と全体的な繁栄に関するあらゆる問題の探求考究に積極的な関心を抱いており、将来もたゆまぬ努力を続け、世界から孤立することはないだろう。このような日本の状況を強調するのは、妬みや悪意から邪悪な意見があるからである。つまり日本の文化は虚飾に過ぎず、外界を錯覚させるでつち上げであり、一国民の突然の改革などは歴史的發展を体験なくしてはありえないという意見である。このような推測は、まったく誤りである。自然界にも民族の生活にも例外は見られる。日本の改革の過程にも例外が存在するのだ。なぜ日本だけが、中国、朝鮮および他の東洋諸国の民族とは違って西欧と類似した能力を示してきたのか、という質問に対してこう答えれば十分であろう。日本人は、二五〇〇年の歴史の過程で、すなわち神代の神武天皇から睦仁天皇まで独自の道を一貫して歩んできており、遠近の隣人とは本質的に異なっていることである。日本の国家のおよび社会的制度の中で、絶えず特殊で固有の方向を求めてきた。それは非常にヨーロッパと合い通じるアジアの地域であった。革命運動に基づき、新たな事業を創造する時が到来し、その必要性が生じたとき、日本は有効な手段と固い意志を持っているのである。

そのため日本では退歩や逆戻りは決してありえないのだ。末松男爵は、一九〇四年五月にロンドンで行った講演で次のように正しく述べたのである。<sup>①</sup>「すなわち「私たち日本人は、祖国を文明化し、あらゆる点で西洋の理念的の世界に同化しよう」と一所懸命に努めてきました。私は、ある程度同化に成功した、と確信しています。そのために多くの財産と血を費やしたのであります。西洋の果実を口にしたら非常に美味でした。私たちそれをあきらめるでしょうか。とんでもありません。私たちはさらに前進し、友人と同じ歩調を取ろうとしています。日本が取り入れたヨーロッパ文明の物質的な恩恵を捨てるつもりは毛頭ないと友人に確約しましょう。すなわち電気的光を導入したからには、もはや油と蠟燭には戻りはしません。鉄道を導入したからには、

もはや徒歩旅行を快適とは思わないのです。電信ケーブルを切断し、再び飛脚を使うことなどありえましようか。それだけに精神面でも後戻りは不可能なのです。」

\*

日本民族の力や文化的改革が非常に重要であり、ヨーロッパにとっても日本の変化が絶対に安全だということをさらに証明することは、いとも簡単である。だが私は真実に対して政治的あるいは民族的頑迷さから心を閉ざしている人々に、以下のことを納得させるには、今まで述べたことで十分だと思う。すなわち、このように情熱的に独自の文化の改新を行い、精神生活の発展のために犠牲を厭わない民族は、決して戦争や領土的侵略を企てることはない、と。我々はこの黄禍という風説は教養ある西洋諸国の近代的な考えに背いており、この空虚で馬鹿げた妄想は故意に捏造され、一定の政治的目的を貫くために世界中に流布されたものだ、と見抜く必要がある。結局のところ明らかになったのは、この犬のようにうるさく吠える声の思想的源は、飽くことなき領土的渴望を満足させようとするロシアにあったのである。ロシアは、西洋的教育を育んだ日本の芽生えの危険性を見、できるだけこの敵を中傷し、ヨーロッパ世界の眼前で信用を失墜させようとしていたからである。文化的水準が高く、我々の世界の平和と自由に本当に関心を持っている国家がこのようなことを発言するのであれば、この警告は真剣に捉えられるだろうし、十分教育を受けていない者にも判断材料を与えるかもしれない。だがそもそも当のロシアにその権利があることすら大いに疑問である。今のアジアの状況では、ロシアは他人のことに口出しすべきではない。ロシアの冷酷な絶対主義と専制君主制自体アジアでさえ、例を見つけないのは困難だからである。またロシアは、日本人は危険で、ヨーロッパ文化を迫害する野蛮人だと訴えているが、モンゴルの野蛮を暗示証拠は日本よりもはるかに多いのであるから、まったく理解に苦しむ。ロシアではピョートル大帝の文化改革のため、今日まで果てしない努力と闘争が費やされ、

二〇〇年以上の改革を経た後にもアジア的な思考方法の鎖が解かれることはなかった。一方、日本はわずか五〇年という短期間で目覚ましい結果を出したのである。その日本人が口汚く罵られ、近代文明の敵という汚名を着せられたということは明白な事実である。文化の多方面で双方の国民を比較すれば、決定的に日本に有利な結果になるであろう。公教育はいづれにせよ最良の試金石である。日本は面積一六万三〇〇〇平方マイル、人口四五〇〇万、ロシアは面積八六万〇三九五平方マイル、人口一億四一〇〇万人であるが、日本の小学校の生徒数はロシアより多い。日本の生徒数は、四三〇万二六二三人で、ロシアのそれはたつた四一九万三五四九人である。日本の小学校には人口一〇〇〇人あたり九二人の生徒が在籍しているが、ロシアでは一〇〇〇人あたりわずか三二人しかいない。高校、大学については日本はさらに有利な状況を示している。また我々が一般的な教育程度、自由な精神的発展、日本人の優れて際立った個性、勤勉さ、芸術愛好心また特に内面的な愛国主義をロシアと比較すれば、いづれも日本に有利となるであろう。以上のように我々は日本の知的な努力に関して、就学率を指摘してきたが、日本の物質面の進歩に関しては、絶えず工業が発展し、貿易が強化されていることが最良の証拠である。また日本の軍隊は事実ロシアの軍隊に匹敵するどころか、勝っていると言えるかもしれない。これはすでに中国における拳匪の乱の間の闘争で示されてきており、フレイ將軍は、自著「渤海湾のフランス軍と連合軍」で日本軍について次のように述べている。すなわち「日本軍は倫理的伝統に支えられ、訓練を積んだ優秀な将校が率いており、戦闘に赴く軍は、常に前進し、崇高な愛国心を吹き込まれ、世界の大軍隊の中でも実に堂々としているのだ。」—そして戦争という流血の場面よりもむしろ日本人は人道主義の分野で傑出していた。日本側のロシア人捕虜や負傷者の感極まる報告からも明らかである。ロシアの負傷者は、東京、広島、松山の病院の清潔さと秩序について、看護人の人間的な態度について、例えば橋本、佐藤、菊池博士のような日本人医師の技能につい

て、賞賛の言葉を残しているが、それでも十分語り尽しているとは言えない。さらに至る所で支配している模範的秩序については、軍隊の冷静さ、将校の実直さと誠実さについてもはや多言を要しないであろう。そこで私は問いたい、一体ロシア人は日本人と同じような徳を胸を張って誇ることができるか、そして日本人を「野蛮なモンゴル人」と非難する権利があるのだろうか。

否、断じて否！それどころか虐待され、良心を失った官僚界に搾取されたロシアは日本人に感謝すべきなのである。というのはツァーリの軍隊に対する日本の一撃は絶対主義勢力を弱め、忍耐強く、お人好しのロシア民族にとってよりよい将来の芽を播くことになるからである。

この戦争はロシア史の転換点となるはずであり、願わくは他のヨーロッパにとって平和な新時代への序曲と考えてよいだろう。永遠の平和攪乱者は今や理性を取り戻し、新たな道を進むべきなのだ。結局のところ「黄禍」という邪推はヨーロッパとアジアに「バラ色の未来」をもたらすことになる。この点において近代的世界(観)を誇る者は、日本人の幸運を祈るべきなのだ。なぜなら日本人は中世的な防壁を破壊し、ヨーロッパの平和のためにも戦っているからである。

(訳注)

(1) 引用文の出典は、以下の文献による。なお、ヨーロッパと日本を教師と生徒の関係になぞらえるた興味深い次の論考を参照。飯倉章「パターナリズムのなかの日本—日露戦争と欧米の日本イメージの変遷」、前掲書『日露戦争研究の新視点』二二九—二四三頁。

(2) ヘルマン・クナックフス(一八四八—一九一五)は、ドイツ・ホーエンツォレルン家の栄光を画題として描いた宮廷画家。寓意画「ヨーロッパの諸国民よ」は、一八九五年にカイザー・ヴィルヘルム二世が素描を示して、彼と共同で完成。この絵の解説に関しては、飯倉、前掲書、七七—八九頁に詳しい。

(3) 膠州湾は、中国山東半島南西部にある湾で、一八九八年にドイツ

が租借した。

- (4) ロシアの遼東半島に対する野心。日清戦争の結果、日本が獲得したが、三国干渉によって還付した。だが一八九八年にロシアはこの半島にある大連・旅順を租借した。

- (5) この東洋の格言は、直訳すると、君主の言葉は言葉の君主だ、となる。

- (6) 一九〇二年二月八日、日本軍が朝鮮半島の仁川沖の奇襲で、戦争を開始したこと、および日本軍の緒戦の勝利を指す。

- (7) 斉藤シンイチロウとしているが、本名は、斉藤修一郎。実は斉藤自身が、手紙で誤記されやすいサインをしていた。ヴァームベリーの斉藤の手紙に基づいた簡単な伝記は、拙稿「ベルリンからの手紙・一八八八年―失意の外務官僚、斉藤修一郎小伝―」『群馬県立女子大学紀要』第一五号、五七―七二頁、を参照。

- (8) ラテン語でデウス・エキス・マキナ、救いの神、と記している。

- (9) 日本が、いわゆる「脱亜入欧」の思想を実現していることを指す。

- (10) 誰からの手紙か不明だが、ヴァームベリーの交友関係からすると、徳富蘇峰であろうか。彼と蘇峰の関係については、以下の拙稿を参照のこと。「日露戦争前夜の日本人によるヴァームベリーの反露思想の受容について」『平成七年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』一九九七年三月。

- (11) 朱熹(朱子)(一一三〇―一二〇〇)の教えかどうかは、不明である。

- (12) 満州におけるロシアの居座りについて。一九〇〇年の義和団事件の鎮圧の主力となったロシア軍は、事件後も中国東北地方(満州)にとどまったことを指す。

- (13) 末松謙澄は、黄禍沈静の密命を帯びて、一九〇四年二月一〇日にアメリカ経由でヨーロッパに向かう。松村正義『ポーツマスへの道―黄禍論とヨーロッパの末松謙澄―』原書房、一九八七、を参照。

- (14) 中島信行(一八四六―九九)、島田三郎(二八五二―一九三三)、片岡健吉(一八四四―一九〇三)、根本正(二八五一―一九三三)、江原素六(一八四二―一九二二)、西原清東(一八六一―一九三九)、鳩山和夫(一八五〇―一九二八)。

- (15) 三好退蔵(二八四五―一九〇八)、青木周蔵(二八四四―一九一四)、大山捨松(二八六〇―一九一九)。

- (16) 片岡は、注(14)を参照。

- (17) 中島力造(二八五八―一九一八)、村上直次郎(一八六八―一九六六)、神田乃武(一八五七―一九二三)、その他は、不詳。

- (18) 矢島梅子(二八三三―一九二五)、津田梅子(一八六四―一九二九)、「ウリュウ」は不明、桜井ちか(一八五五―一九二八)、安井てつ(一八七〇―一九四五)、成瀬仁蔵(一八五八―一九一九)。

- (19) 徳富蘇峰(二八六三―一九五七)、島田三郎(上述)、頭本元貞(生没年不明)、横井時雄(一八五七―一九二七)、山路愛山(一八六五―一九一七)、「タキコシ」は、ヴァームベリーの誤記で、竹越与三郎(一八六五―一九五〇)、巖本善治(一八六三―一九四三)。

- (20) 末松のイギリスの新聞記事に関しては、村松、前掲書、一二三頁を参照。

- (21) ロバート・ハート卿(一八三五―一九一一)は、イギリスの外交官で清国の総稅務司。

- (22) 康有為(一八四〇―一八九七)は中国の革命家。

- (23) 東亜同文会に関しては、この会の基本的で網羅的な資料、東亜文化研究所編『東亜同文会史』霞山会、一九八八、を特に参照のこと。なお、この会の成立の契機に関して簡単に触れている次の拙稿をも参照のこと。「日露戦争前夜に中央アジアを旅した日本人―井上雅二『中央亜細亜旅行記』(一九〇三年刊)に寄せて―」『群馬県立女子大学紀要』第二六号、二〇〇五、一一―一二三頁。

- (24) この個所に、一八六八―一九〇三年の日本の輸出入額が表で記載されているが、紙面の都合で略す。

- (25) ロシアでは実際に樂觀的にそう考えていた者もいたらしい。横手慎二『日露戦争史』中公新書一七九二、二〇〇五、一〇五頁を参照。

- (26) 筆者が、鎖国の原因の一つを日本でのカトリックとプロテスタントの僧侶の利権争いと捉えているのか不明である。

- (27) 「五箇条の誓文」をヴァームベリーがドイツ語訳したもの。彼独自の解釈が入り、忠実な逐語訳となっていない。

- (28) 安政の仮条約(不平等条約)のこと。

- (29) 岩倉使節団と称される一八七一年から一年九ヶ月にわたる近代史上まれに見る政府首脳による米欧視察大旅行のこと。最近の研究では田中彰『明治維新と西洋文明―岩倉使節団は何を見たか―』岩波新書、二〇〇三、を参照のこと。
- (30) 当時の日本が自由主義的であるとすするヴァームベリの一貫した思い込みの表れ。
- (31) 末松のロンドン講演（ヴァームベリの日本に関する情報はどうやら末松から）とすれば、末松の影響は、看過できない。
- (32) 当時のヨーロッパ自由主義的知識人が共有する進歩史観的、アジア蔑視の典型的な語法。
- (33) 義和団事件（一八九九―一九〇〇）を欧米ではこう呼ぶ。英語では Boxer Rebellion。
- (34) アンリ・ニコラ・フレイ（一八四七―一九三二）。正式な書名は、*Français et Alliés au Pé-tchi-li, Campagne de Chine de 1900* [渤海湾のフランス軍と連合軍、一九〇〇年の中国遠征]、Paris Hachett et ci.
- (35) 捕虜に対する日本人医師の人道主義に基づく姿勢。特に松山捕虜収容所におけるロシア人捕虜に対する対応は有名。才時時雄「松山収容所」中公新書、一九六九、を参照。
- (36) ヴァームベリの暗示は、一九〇五年のロシア第一革命で現実。

## 解説

本稿で訳出したヴァームベリの小冊子『黄禍』は、題名から想像されるのとは逆にその内容は反黄禍論である。この小冊子は、ロシアの政府とジャーナリズムが欧米の世論に黄禍を訴え、日本との戦争を正当化したのに反駁し、ロシアの野望を暴き、日本の立場を擁護し、黄禍論の滑稽さ、無意味さを説いている。

ヴァームベリがこの冊子を書いた動機は、本稿の「はじめに」でも触れたように、直接的にはウィーンの牧野公使からの依頼であった

が、執筆を促した背景にはヴァームベリ自身が従来から持っている強い反ロシア、親イギリスの姿勢があったと言える。ではなぜ彼が、そういう姿勢を持ったのかについて、ここで簡単に確認しておきたい。

ヴァームベリの思想傾向に関しては、彼の中に、一般的に一九世紀後半のヨーロッパの自由主義知識人が専制主義体制ロシアに対して共通に抱く悪感情や膨張的なパンслав主義に対する圧迫感、さらにハンガリー人としては一八四八―四九年のハンガリー革命がロシア軍の介入で挫折したとの苦い記憶がなお鮮明に残っていたことから説明できるかもしれない。だが彼の思想的な性向を理解することより重要なのは、イギリスが、彼の辛苦を極めた中央アジア旅行と彼が築いたトルコ・中東の人的なネットワーク、優れた語学力を高く評価し、旅行記の出版を促し、政府首脳・要人との交流を可能にし、王室「ウインザー城」への自由な出入りを許したことであった。彼が、こうしたイギリスにおける高い評価と個人的な心地よい体験を得て、またネオ絶対主義と呼ばれる古いハプスブルク君主国の支配下にあるハンガリー出身ゆえに当時のイギリス自由主義により強く魅せられたということだろう。彼が命を賭して潜入した中央アジアは、イギリスとロシアとの覇権争い、いわゆる「グレート・ゲーム」の中心であり、イギリスは、彼がもたらした得難い中央アジアの情報が高く評価し、ジャーナリズムは、こぞって彼に記事を書かせた。こうして彼は、自ずとイギリス帝国主義の尖兵に仕立て上げられたといっても過言ではない。なお彼のジャーナリズムにおける過激化する反ロシア的な発言は、やがてイギリスにおけるロシア諜報員オルガ・ド・ノヴィコフにマークされる存在となり、また彼自身後にイギリスの諜報機関との関係を取沙汰されることになる。

ところで、そもそも『黄禍』は、どのような経緯で誕生したのか、その経緯にも触れておこう。牧野が、この計画を発案したのは、日露戦争開始まもなくであった。黄禍（当時の呼び方で黄人禍）の「防止」は、元々日本政府の方針であったが、牧野がただちに反応したのは、

実質的な開戦に当たる二月八日に日本が朝鮮半島で行った戦闘行為を、ロシアが「宣戦布告のない奇襲攻撃」「国際法を無視した野蛮な行為」と喧伝し、国際世論を誘導するのに用いた時期に当たっていた。ロシアの宣伝が功を奏する危険を察知した牧野は、何らかの手を打つ必要があり、それを彼独自の方法で実行に移したということである。

牧野の計画が、日本政府よって承認される経緯を示す貴重な資料は、外務省外交史料館所蔵の記録綴り(ファイル)『非黄禍論編述発行ノ儀ニ関シ在塙公使ヨリ稟伸一件』である。それによると牧野は時の外務大臣小村寿太郎に、一九〇四年四月一五日付公信・機密第二七号「黄人禍ヲ正スノ件」で、執筆を同じハンガリー出身者のシュトラウス教授に依頼したものの、何らかの事情で断られたと述べているが、ここで外国人に小冊子執筆を依頼する計画を初めて明らかにしているが、五月一九日付公信・機密第三六号「ワンベリ教授ニ面会ノ件」では、牧野は、ブダペストを訪れた際にヴァームベリに会い、小冊子の執筆を依頼した旨を小村に報告している。また五月三〇日発、牧野公使より小村宛の電信・第八五号では、小冊子一万部出版の費用として英貨二百ポンドの支払いを要請している。これに対し小村は、すばやく反応し、五月三一日発の牧野への電信・第三六号、でそれを許可している。さらに六月二日付、牧野から小村への公信・機密第四一號「黄人禍ノ件」では、牧野がウィーンで会ったヴァームベリと、執筆方法、費用に関してより詳細な協議がなされた旨が、報告された。次いで牧野から小村への七月三〇日付電信・第一三八号では、費用ノ件が語られ、著述出版費一七〇〇円、六か月間の「手当て雑費」一四〇〇円、機密費三〇〇〇円、合計六一〇〇円が要求された。小村は、八月一日付牧野宛電信・第五四号で、一万五〇〇〇オーストリア・グールドを伝送した旨を伝えた。こうして見ると小冊子発行と諸費用に莫大な費用がかかっているが、逆にそこに「黄人禍防止」の緊急性と重要性が如実に現われていると言える。

こうして書かれた『黄禍』は、新聞・雑誌記事ではなくて日本員

の外国人の書いた珍しい反黄禍論調の小冊子形式で、薄くて読みやすく、その内容は学術的というよりも大衆向きの日本の紹介になっている。「：黄人禍云々ハ学識アル社会ヨリハ寧ロ日常新聞記事ニ左右セラル、社会ノ中層以下ニ多クノ傾聴者ヲ有スル：」からで、おそらく当時ヨーロッパで発行された日本論を下敷きにした大衆向きの噛み砕いた啓蒙書であり、そこに黄禍を受け入れやすい層への対応が見える。またこの小冊子にはドイツ語版とフランス語版があるが、その理由もヴァームベリが言うには、「流言ハ重モニ、塙・独・仏ノ三国ニ地盤ヲ作りツツアリ将来其害毒ヲ流シ候ハ此地方ニ多カル」ということで、オーストリア・ドイツ・フランスが反黄禍宣伝の対象と認識されているのが分かる。

\*

さて日本政府の意図にヴァームベリは、どれほどよく応えたのであろうか。この小冊子は、後進アジアの、つい最近までは封建的国家であったものの、瞬く間にヨーロッパ文明を吸収し、今や先進ヨーロッパと並ぶ自由主義的な近代的国家になった日本に対する惜しみのない賞賛で終始貫かれている。彼は、ロシアが、日本を揶揄し、軽蔑し、この戦争を(一)日本の大陸進出を阻止する戦い、(二)文明と野蛮との戦い、(三)キリスト教徒と仏教徒との戦い、(四)白人種と黄色人種との戦い、と位置づけ、欧米の世論に自らの「聖戦」「十字軍」を訴えるのに対して、各々に反論する形をとっている。すなわち、

(一)日本の大陸進出を阻止する戦いに関しては、ヴァームベリは、飽くことを知らない領土的野望を抱き、策略好みのロシアが隣に居座るので、危機を抱く日本が止むを得ず戦わざるを得なかったと述べ、日本にとってあくまでこれは防衛戦争であると力説する。

(二)文明と野蛮との戦いについては、彼は、日本の教育水準がロシアに比べていかに高いかを数字を挙げて述べ、「どちらが進歩しているのか」とロシアを揶揄し、逆に「モンゴルの野蛮」はロシアこそが体現していると指摘する。



(三) キリスト教が公認されているかどうかは、ヨーロッパ人にとって重要な文明化の尺度であるが、彼は、日本におけるキリスト教の受容、信教の自由は、「ヨーロッパのどの国よりも進んでいる」と述べ、またいかにキリスト教徒の多くが社会の重要な地位についているかを例証して見せている。

(四) 白人種と黄色人種との戦いに関しては、彼は黄色人種が一丸となって、ヨーロッパに攻めこむなどは、作り話に過ぎず、「白・黄色人種は、あくまで地上では長く共存できず、いずれか一方が支配的な立場に立つ」というが、はじめから「両人種は、平和的な共存は不可能であるという間違つた前提に立っている」と、人種論に反駁を加える。

以上のようなロシアに対する反論と並んで、彼は、中国と日本が経済・軍事の分野で連携してヨーロッパに対抗するという点に対しても反論を加えている。当時日本人のあいだにある、例えば近衛篤磨の提唱するような日清の「同人種同盟」論<sup>9)</sup>に対するヨーロッパの疑念を打ち消そうとしているのが分かる。

このようにヴァームベリは牧野の依頼に依りて、ロシア発の黄禍の事実無根を暴いて見せた。彼は、イギリス流の自由主義を受け入れ、近代化を實踐し、「ヨーロッパの優秀な生徒」と日本を称えている。ただし当時の日本政府と同様、彼の視点には、戦場となった朝鮮・中国の民衆の苦しみに対する、換言すれば植民地化される地域と民衆に対する共感は一切ない点に注意しておく必要があるだろう。そこに彼のヨーロッパ帝国主義の尖兵の役割が色濃く表れていると言える。

彼が、黄色人種の脅威をきつぱりと否定する論拠として、日本の近代化の様を賞賛・評価すればするほど、ヨーロッパ人には日本の脅威に対する不安を与えかねなかつたであろう。同様に彼は、中国が、日本の指導で覚醒している現実を例証し、日本が、ヨーロッパの侵略から中国を守るために尽力するのは当然であると主張すれば、それは図らずも日本のアジアの指導力の強さを際立たせることになつてしま

う。したがつてこうした論調は、日本と中国の連携が存在しないという彼自身を主張を明らかに弱めているとも言えよう。さらに、日本を高く評価するあまり、忠実で出来のいい生徒である日本が教師であるヨーロッパを抜くのは正当なことで、「教師は、生徒の成長を妬んではならない」と述べ、かえつてヨーロッパ人に日本の将来の脅威を印象付け、結果的に黄禍論に与することになる。現に日露戦争の開始後、日本の過去・現状・将来性をしっかりと見据えた日本論が出てくる。それらの記事に共通する特徴は、ロシアが相手にしている敵は、決して極東の小国などではなく、もしこの国が勝利すれば、必ずアジアの指導的地位につき、ヨーロッパのアジアの權益を侵害すると予知していることである。ヴァームベリの小冊子もそう読まれる危険性を孕んでいた。日本が短期間に「ヨーロッパ近代」の成果を自分のものにし、もはや後退しないであろうことは、周到に計画されたこの戦争で、ヨーロッパ人の目には明らかになつた。日本はある意味では、この時から本格的にヨーロッパの黄禍論と立ち向かうことになつたのである。いづれにせよ皮肉なことに彼の『黄禍』はその意図を超えて、悔りがたい日本像を作るのに貢献したと言える。

なお、付言すれば、ヴァームベリは、明治三十九年に勲二等瑞宝章を受ける。その理由は「…而シテ同人カ最モ力ヲ添ヘタルハ黄禍論ヲ排撃スルニアリ：此際ニ於テ黄禍論一冊ヲ著ハシ仏獨両語ニテ邪説ヲ駁撃シ詳細ニ帝國政治ノ正義ニシテ自由主義ナルヲ論証シ當時大ニ世論ヲ傾聴セシメタリ：同人文筆上尽力ハ大ニ時局中帝國政府ノ見地ヲ明カニシ帝國ニ係ハル妄議ヲ正スニ貢献アリタルモノニシテ：」<sup>10)</sup>であった。これを上奏したのは外務大臣林 であつたが、ヴァームベリを林に推薦したのは、牧野であつた。

(注)

(1) 拙稿『「反露主義者」アールミン・ヴァームベリ』山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺―歴史論集―』ナウカ、一九九二、三四一―三

- 七七頁。
- (2) Alder, Dalby, *op. cit.*
- (3) ロシア諜報部員との戦いについては、*op. cit.* に詳しい。とくに pp. 307-308 を参照。なお拙稿、前掲、三六五—三六六頁、をも参照。
- (4) 拙稿、前掲、「牧野伸顕と日露戦争(二)」七八—八二頁、を参照。
- (5) 牧野のシュトラウスへの打診は、外務省外交史料館文書で明らかである。
- (6) 当時、「社長より高給」で朝日新聞社に迎えられた夏目漱石の年俸(一九〇八年頃)が、二四〇〇円と考えると、この小冊子にいかにも高額の費用を使ったかが、推測できる。ちなみに当時大学出の新聞記者の初任給は三〇円前後。「歌う記者 石川啄木」二、『朝日新聞』二〇〇七年二月八日(夕刊)。
- (7) 小冊子『黄禍』の装丁も大衆向きであった。表題と著者名の文字が、一見漢字のような書体になっている。旗を持ち、かぶとをかぶり、馬に乗った侍らしき人物が、挿絵として付いている。字体の色は、黄色である。
- (8) 日露戦争当時、日本人による大部な日本紹介本が出ている。Alfred Stead (ed.) *Japan by the Japanese—A Survey by its Highest Authorities—*, London, 1904. これにはドイツ語版もある。 *Unser Vaterland Japan—Ein Quellenbuch geschrieben von Japanern*, Leipzig, 1904.
- (9) 「同人種同盟」論に関しては、拙稿、前掲、「日露戦争前夜に…」を参照のこと。
- (10) 飯倉、前掲、「パターナリズムのなかの日本」二三—三三頁、を参照。
- (11) 拙稿、前掲、「牧野伸顕と日露戦争(二)」四五頁、を参照のこと。
- (12) 飯倉、前掲書、一八八—一八九頁参照。拙稿、前掲、を参照。
- (13) ヴァームペーリの叙勲に関しては、梅溪谷昇編『明治期叙外国人勲資料集成』第四巻、思文閣出版、一九九一、二九六頁、「洪牙利国ブダペスト大学名誉博士プロフェッソル、アルミニウス、ワンペーリ同上ノ件」を参照。